

第8回現地会議in宮城

仮設後のコミュニティ形成を考える ～阪神・淡路大震災の経験から～

NPO法人阪神高齢者・障害者支援ネットワーク
理事長 黒田 裕子

第8回現地会議in宮城 2013.11.29

何故、ボランティアが必要か。

基本的視点とは

- ・被災地・被災者の現実から出発する
 - ・今、被災地で何がおきているか？それを知らずして、被災者や復興のあり方を議論しない。
- ・支援活動に採る原則とは、最大の原則は、人間の尊厳を尊重することである。なぜならば支援の対象は、被災国ではなく、被災した人間であるから・・・特に要援護者に視点を向ける。

当団体のボランティア活動とは

- ・旧来の福祉活動のみならず
教育・保健・医療・生活・文化・環境そして国際
協力など幅広く展開
- ・参加する層
中・高年を中心とする女性層のみならず
今では、シニア層・青少年層・企業人の参加
時には、犬のボランティアも……

阪神・淡路大震災の概要

- ・日時 平成7年1月17日(火曜日)
AM5時46分
- ・規模 マグニチュード 7.3
- ・特徴 人口350万人余りが密集し、経済活動の中枢を担う神戸・阪神地域の内陸・都市直下型地震
- ・死者 6,434名 (行不明 3名)
- ・負傷者 40,092名
- ・住宅被害 538767棟(うち全壊104004棟)
- ・避難者 1,153箇所 316,678名(ピーク7日目)

東日本大震災の概要 ①

- 日時 平成23年3月11日(金)
午後2時45分ころ
 - マグニチュード 9.0
 - 気仙沼市の震度 6弱
 - 津波の高さ 最大20m超
- <2つの震災を実践している何の為に>

東日本大震災の概要 ②

～震災前・後の気仙沼の状況～

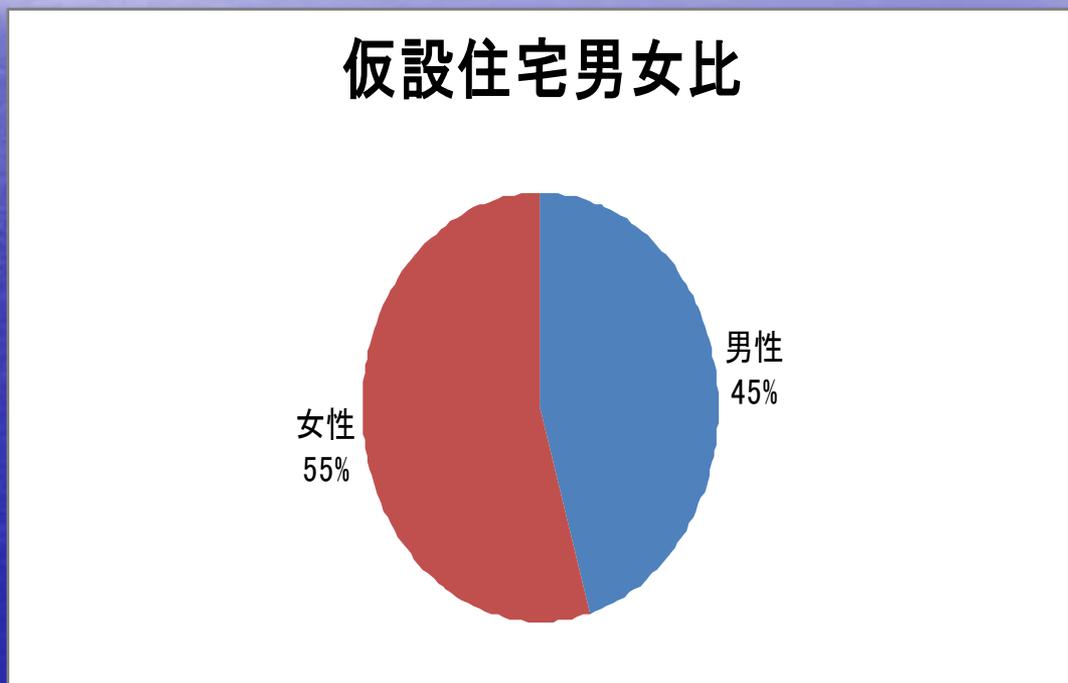
H23.3.1現在⇒ H24.4.1現在

- 人口 73,154 人⇒ 68,335 人
▲4,819人
- 世帯数 26,601世帯⇒ 25,511世帯
▲1,090世帯
- 高齢化率 30.0% ⇒ 30.5%

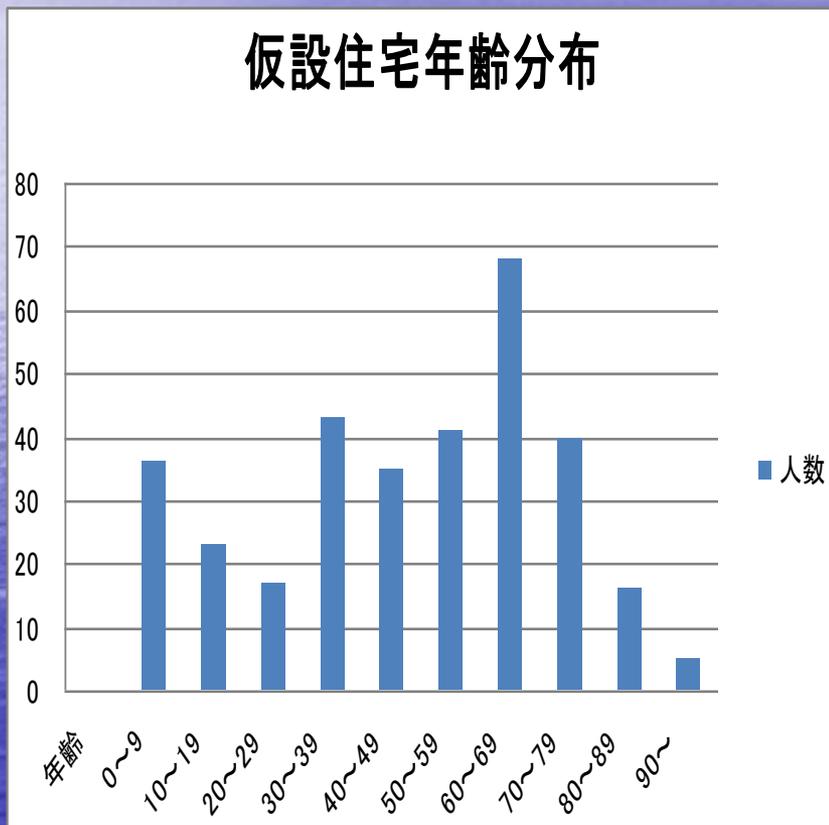
気仙沼市立面瀬中学校仮設住宅

の人口構成(1)

仮設住宅概要	(人)
男性	159
女性	191
全体	351
世帯数	142
1軒当たりの平均入居人数	2.47



気仙沼市立面瀬中学校仮設住宅の 人口構成(2)



年齢	人数 (人)
0~9	36
10~19	23
20~29	17
30~39	43
40~49	35
50~59	41
60~69	68
70~79	40
80~89	16
90~	5
計	324
最年少	1歳
最高齢	93歳

活動構成メンバー

- ・自治会長
- ・民生委員
- ・介護福祉士
- ・医師、歯科医師
- ・看護師
- ・友愛訪問員
- ・仮設内住民ボランティア
- ・一般、学生ボランティア

多くの方々の
協働が大切



活動内容 1



- ・24時間体制での見守り(看護師常駐)
- ・コミュニティづくり
お茶会や毎朝のラジオ体操などの日常生活リズムの安定化、および【場】の提供
- ・訪問看護・介護活動による安否確認、
自殺および孤独死の予防
- ・自治会支援



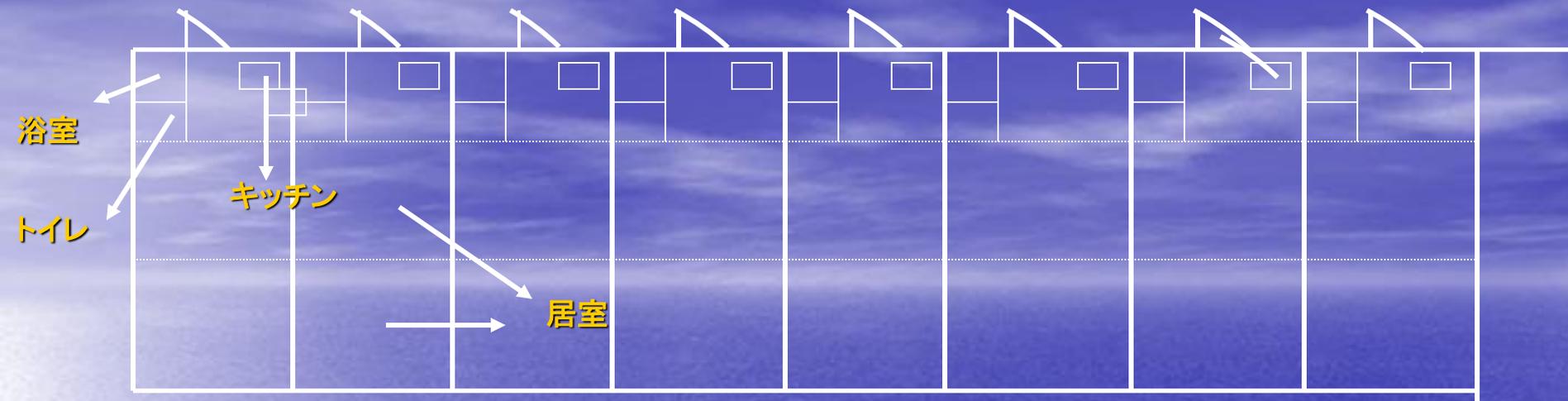
活動内容 2



- ・各種イベントのコーディネーター
- ・継続的なこころのケア
- ・託児所、子供の居場所づくり(遊び場提供)
- ・現地支援者、支援団体へのサポート
- ・次の棲家に移るための準備の構
- ・その他

生活全般における悩み相談





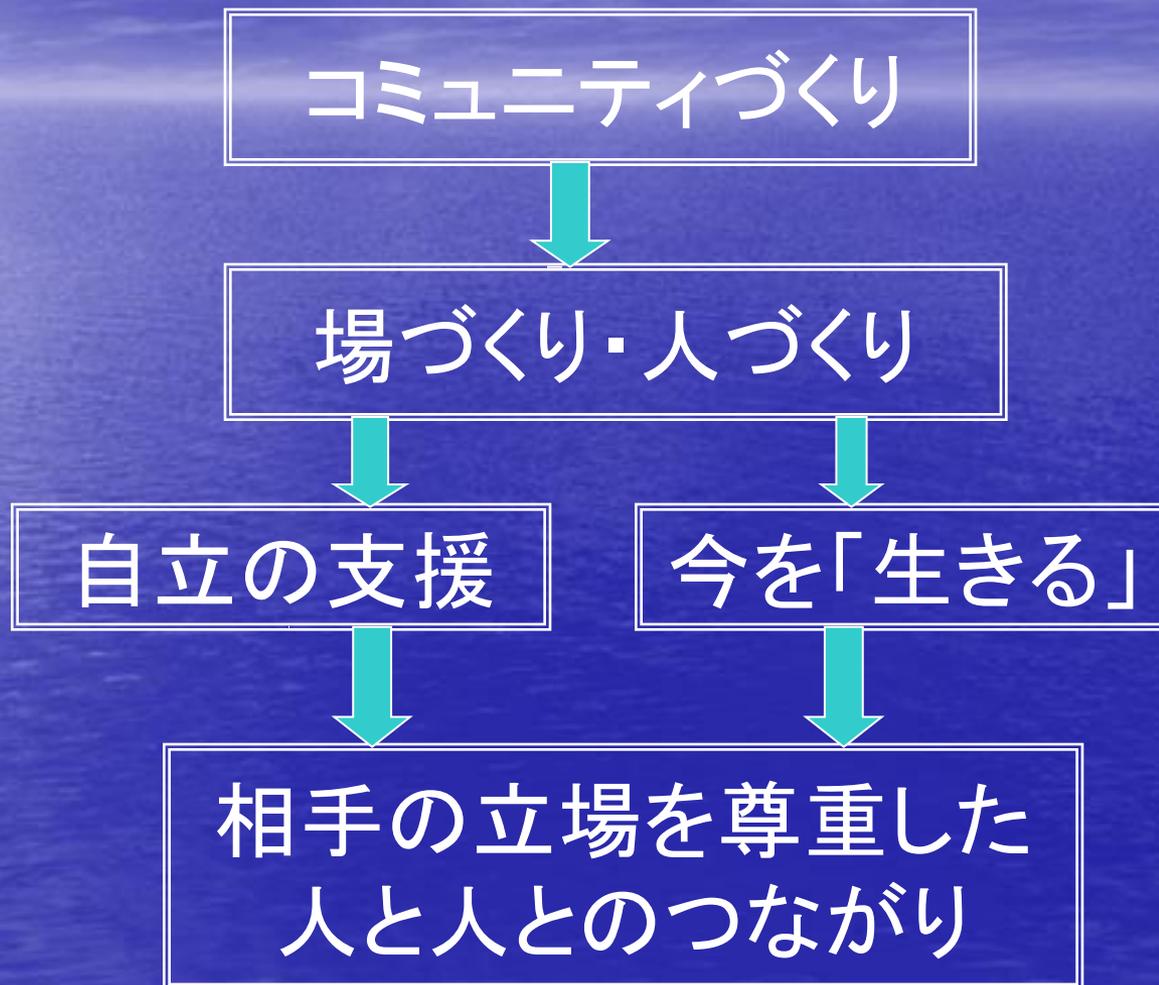
仮設住宅における要援護者対応(グループハウスへの改修)



共同浴室



いつの時期においても場づくりと人づくり



復興住宅とコミュニティ作り

- ・転居直後の災害復興住宅ではコミュニティが薄い
(バスツアー・訪問活動・なんでも相談)
- ・人と人をどのように繋ぐか(行政では出来にくい→ボランティアが入ることにより、柔軟に活動が出来る)
- ・移動市場の展開・コンビニ福祉(6箇所)展開
- ・訪問(ニーズを把握→アセスメント)、お茶会の開催(場づくり)、様々なイベント開催

人権尊重を基本にした支援を行うことにより、
コミュニティが築ける

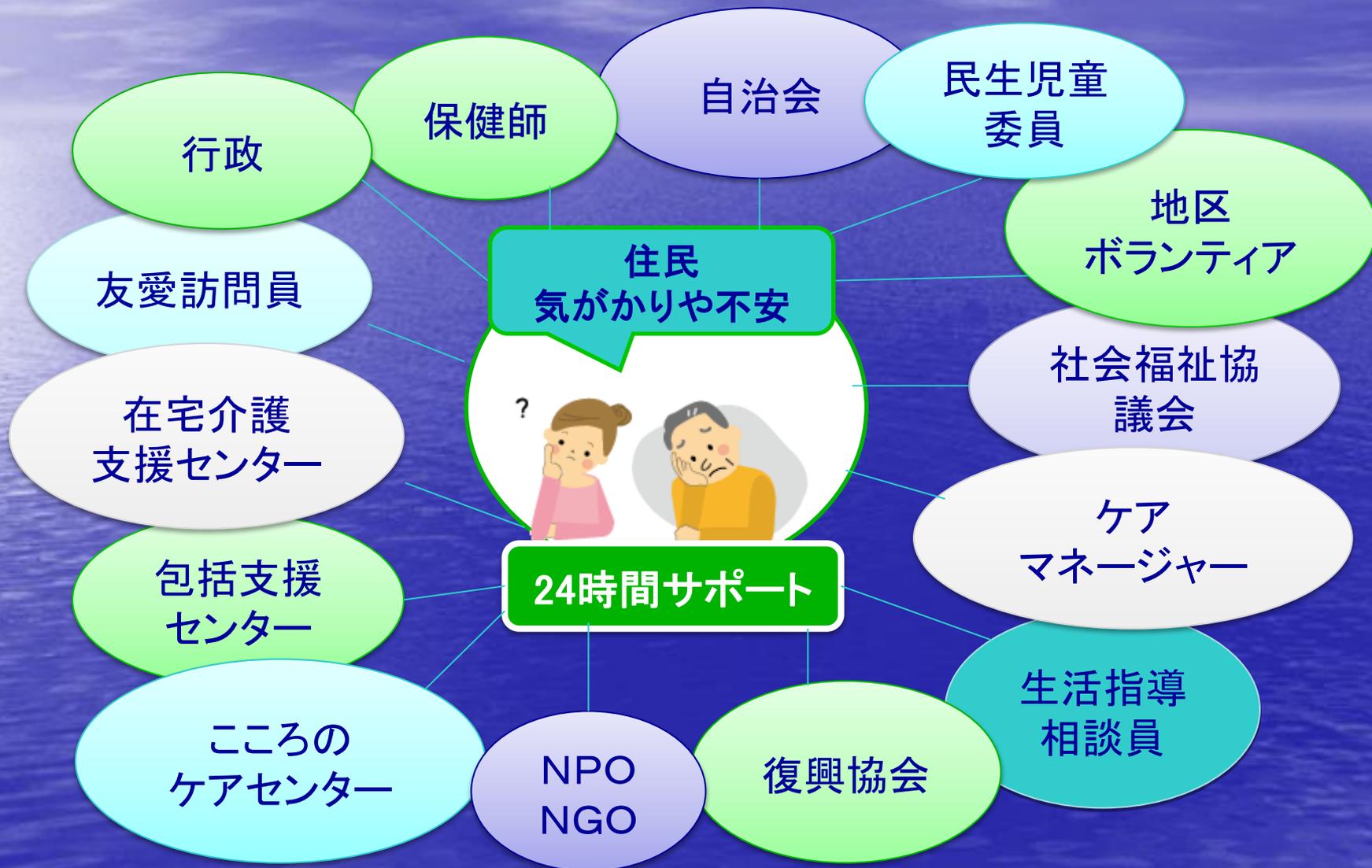
健康を維持する為の ネットワークの重要性 ～最期のひとりまでを救う～

- ・社会資源
- ・福祉資源
- ・地縁組織

産・官・学・民の連携

医療・福祉・保健の連携

連携



ボランティアコーディネーターの役割

「ひきだす、つなぐ」

何をつなぐのか

受援者と支援者

時間、空間、人間

生きる力

人間尊厳、自己実現

自立と共生、連携、

考察 1

- ・災害サイクルにみる時間経過や季節による看護の変化をきめ細やかに捉える
- ・復興住宅にも多種多様なニーズがある
- ・極めて複雑な生活の場におけるニーズに真摯に取り組む
- ・その人の価値観を尊重、日々の生活に視点を置く



考察 2



・集会所でのお茶会を通じて
コミュニティの強化



住民同士の支援が始まる



閉じこもっていた人が外出
生活不活発現象の予防

・対象をとらえる際は、全体の中の【個】
〈生活の中から健康を維持できる。〉



今後の課題



- ・「人間」と「地域」と「暮らし」の一体化
- ・災害・地域の特性から復興を考える。
- ・「人間」を捉えた復興を考える。
(避難所・仮設住宅・復興住宅(集会場))
- ・教訓を活かすために人選を考える。
- ・多職種の人々による。
中・長期を見据えたネットワークの構築。

最後に……

- ・コミュニティ形成の為に避難所・仮設住宅で学んだことを復興住宅の場で活かす。
そのことがひとりの人としてのいのちを救う。
- ・最後の一人までも見捨てないための地域での対策のあり方も考える。そこにおいてもマネジメントのコーディネーター重要である。
- ・「自助」「共助」「公助」の確立が大切であり、自分たちで支援活動できるように地域社会を再構築する。
- ・「人間」と「生活」と「くらし」が一体化の中での活動を展開

そして「再生社会・共創社会」をつくりましょう
豊かな人間関係の中に、豊かな発想が誕生します。